彙報

京都大学文学部哲学科卒業論文題目

——昭和五十四年三月——

哲学専攻

水谷雅彦　後期マックス・シェーラーの哲学的人間学
——「協和」の概念を中心として——

藤井雅人　ホワイトヘッドにおける現実的実在の概念

守谷広司　カントに於ける認識の問題

吉浦伸二　カントの『道徳形而上学原論』の考察

鬼界彰夫　知識の変革と学問の再構成
——Regulaeにおける Descartes の人間の知識に関する学説——

松田毅　フッサールの『デカルト的省察』における他者知覚の問題性

宮原勇　フッサールに於ける「反省」について

西洋哲学史専攻

市橋靖夫　プラトン『パイドン』における魂＝調和説への論駁に関して

斉藤了文　ア・プリオリ
——カント『純粋理性批判』の理論的基礎をめぐって——

原豊広　ジョン・ロックにおける知識論とその意図

安藤正人　デカルトの哲学における直観

村往正英　カントの道徳論

中国哲学史専攻

末岡宏　劉師培の無政府主義思想について

林克　新語研究

心理学専攻

石原哲　絶対音感の諸問題

大谷芳夫　大脳半球間の機能差について

狩野晃子　記憶・認知における具象性・抽象性の役割について

北山忍　集団規範に及ぼす少数者の影響

小林隆　性概念の発達

佐藤みどり　反復聴取の効果

辻阪吟子　心の動きと非言語伝達機構との協応関係

坪井克司　文字再生に及ぼす聴覚的マスキングの影響について

日根野雅代　比喩文の理解と Cue recall について

前野佐代子　青年期における性役割の認知

山村啓介　帰属理論と印象形成

吉村英　Intrinsic Motivation に及ぼす諸要因の効果

増田真弓　幼児の競争行動に及ぼす対人及び教示条件の影響
片岡基明　空間概念の発達
——ことばの理解を指標にして——
島原靖彦　目標追求過程としての要求水準と自己受容度の相関について

倫理学専攻

千田正英　『われとなんじ』における〈なんじ〉の〈われ〉性について
——マルティン・ブーバーの神観をめぐって——
井上成二　フロイトの防衛機制について
石間毅史　私的善悪と共同体的善悪について

美学美術史専攻

鹿子木伸子　宗達派草花図の展開について
北村清彦　P・リクール　テキスト理論と解釈学
佐久間陽一郎　クラーゲスによる生命・精神・感情の基礎理論について
多賀茂　芸術と意味
寺岡美智子　新印象主義
山崎泰子　東寺西院曼荼羅の日本の曼荼羅系譜上に於ける位置について
山口典子　ゴッホの芸術
道家康世　クローチェの芸術と美に関する見解
——表現の学と一般言語学としての美学、或いは芸術学——
市場義人　美の感受における精神のあり方
中村俊春　ヒルデブラントの「フォルムの問題」について
鷹羽良明　ゴシック建築の空間について

社会学専攻

近藤哲夫　消費行動の社会学的分析
寺西厚史　マス・コミュニケーション研究における擬似環境論の考察
百合本直子　家族の機能としての社会化
吉村美智子　組織における官僚制的逆機能
——March と Simon の組織論に依拠して——
米澤広行　遊戯と社会
蘭信三　農民意識へのアプローチ
——その方法論的検討——
大西富洋　行為と価値
田上浩　社会的カストと偏見
田中伸児　「天白社」に関する一考察
平尾博志　デュルケムの集合意識論

松田素二　社会構造理論の三つの位相と四つの類型
——社会人類学的視点から——
森平俊一　パーソナリティの社会的形成に関する考察
加藤一己　G・H・ミード論
宮治宏一　交渉に関するゲーム理論
荒木仁夫　現代社会論とM・ウェーバー

宗教学専攻

清水邦之　日本の創世神話
対本宗訓　ユングにおける宗教思想
門脇　健　『精神現象学』における「自己意識」の研究
司馬春英　Whitehead の Actual Entity に就いて

仏教学専攻

箕浦　遵　Tarkasopāna について
——とくに anupalabdhi の問題を中心に——
野口圭也　Hevajratantra における Abhiseka について

京都大学大学院文学研究科（哲学科関係）
修士課程修了論文題目
——昭和五十四年三月——

哲学専攻

小林富美子　カントの認識論におけるア・プリオリな総合的判断の可能性について
中島英司　デカルトにおける外界認識の問題
平松希伊子　デカルトに於ける Physique Générale の成立
金田　明　Hume に於ける「経験からの論証」のもつ方法的意義について
田辺勝義　デカルトの外界認識における感覚の役割
藤田千恵　ベルクソンにおける心身問題
——『物質と記憶』を中心として

西洋哲学史専攻

飯塚知敬　トマスに於ける「真」の研究
——真、偽、善の相互の関係について——
金山弥平　プラトン『テアイテトス』『ソピステス』に於ける虚偽の思わく（ψευδὴς δόξα）
堺　正憲　アウグスティヌス『教師論』の基本的構造
松崎一平　De falsitate A. Augustini Soliloquiorum
西村　誠　『判断力批判』における反省的判断力の問題
宮武由紀江　アリストテレス哲学に於ける「実体」
——その諸相と意味——
吉川康夫　ニーチェの「力への意志」

倫理学専攻

佐別当義博　尊敬の概念
——カントに於ける実践的主観性に即して——

高見保則　デューイに於ける価値と探究

中国哲学史

福島正　史通—その史法と史意

宗教学

気多雅子　ニーチェの「神の死——ニヒリズム」

吉田喜久子　マイスター・エックハルト
——ドイツ語説教集に於ける宗教上の根本問題——

石島孝文　カントにおける自由の概念の諸問題

基督教学専攻

伊藤聡　ハイデッガーの思索と》Kehre《

心理学

加藤啓一郎　乳児期における対象概念の獲得について

桜井芳雄　ラットの睡眠の被影響性と覚醒中の行動形成における役割について

前川幸子　語認知におけるマスキングの効果

岡本真一郎　情報の valence と media とが、情報伝達に及ぼす影響

北田隆　内発的動機づけに及ぼす結果と外因性報酬の効果

社会学専攻

小川賢治　階級意識とその規定要因

大杉至　現代社会意識理論の一考察

中島道男　デュルケムにおける哲学と社会学

三上剛史　K・マンハイムのユートピア論をめぐっての批判的考察

田中滋　物象化論
——その社会学的展開——

美学美術史学専攻

河野弘美　カンディンスキーの抽象画における形態の変化

島本浣　Antoine Watteau の作品研究
——Fêtes galantes の成立とその意味

室井尚　文学の言語
——言語における「美的なるもの」につい

て――

井面信行　コンラート・フィードラー　芸術論の生成と構造

梅原賢一郎　メルロ＝ポンティと芸術

（附記：昭和四十六年度以降五十三年までの修士論文題目および卒業論文題目については、順次掲載する予定です。）

会告

京都哲学会は去る一月二十五日（木）委員会を開き、次の通り新しい編集方針を決定いたしました。

一、外国人学者の論文の翻訳は、当分の間、原則として掲載しない。

二、掲載論文は、原則として、四百字づめ原稿用紙六十枚までとする。

三、掲載論文については、その都度、二名以上の委員が閲読、承認したものに限る。

四、彙報を復活する。

五、適当な書評欄を復活する。

六、上記の編輯方針は刊行が順調に行われるまで継続する。

右は「哲学研究」の刊行の現状および従来の歴史に鑑み、将来の再興を企図して決定したものであります。会員各位の御理解と御協力をお願いいたします。（なお、今後は少くとも年間四冊を刊行する予定です。）

昭和五十四年五月　　京都哲学会

会告

このたび、阪本財団から、京都哲学会へ、昭和五十四年度の「哲学研究」刊行のために、多額の補助金を頂戴いたしました。ここに深甚の謝意を表しますとともに、あはせて、会員各位に御報告申し上げます。

昭和五十四年五月　　京都哲学会